

「全鍍連」 2022年 3月号 巻頭言

全鍍連 常任理事 内田 悦美(光鍍金工業(株) 代表取締役社長)

「全国めっき技術コンクールを通じて思ったこと」



本年度（令和3年度）は、全国めっき技術コンクールが無事開催されました。昨年度は新型コロナウイルス禍のため残念ながら中止となりましたので、二年ぶりの開催となりました。研磨－装飾クロムめっき、無研磨－装飾クロムめっき、亜鉛めっき、無電解ニッケルめっき、硬質クロムめっきの5部門に、全国より合計 396 件の参加がありました。コロナ禍の影響で例年よりは少々少ない参加件数ではありましたが（例年は 500 件前後）、内容は熱いものでした。

本年度より技術委員会の一員に加えて頂き、初めてコンクールの審査に参加させていただきました。そこで感じたのは、参加作品のレベルの高さと参加者の熱意です。特に上位の作品ともなると、どれも甲乙つけがたく、僅差での判定に頭を悩ませました。そしてその背景には、参加者がめっきに関する知識と技能を総動員して創意工夫をこらし、最高の作品を仕上げようと奮闘する姿が想像できました。素晴らしい体験でした。

このコンクール審査を通じて改めて感じたことは、基本知識、基本技能の大切さです。近年はめっき作業も自動化、設備が進み、日常的にはスイッチ一つで高品質な製品が効率よく量産できるようになってきました。今後は IoT や AI の活用により、より自動化が進んでゆくものと思います。と同時に現場において「めっき」を実際に見る、触れる機会が減少してしまうことも進んでしまうでしょう。めっき加工には、単純に数値化できない、見えない要素が多くあり、それらがめっき加工精度の重要なファクターであったりもします。ゆえに、工程が高度に自動化されても、内部で起こっている反応や現象を想像しながら作業を行うことが肝要で、これを日々行っているか否かで、異常時への対応や新しい工程の創造、つまりは現場技術力の差となって違いが出てくると、私は考えます。

必要な基本的知識、技能を忘れないように身に付けておくためにも、めっきの手付け経験は必須であり、全国めっき技術コンクールはその一助になっていると思います。

めっきはあらゆる製造業を土台で支えている基盤的な加工技術です。モノづくりの進化にはめっき加工の進化も不可欠であり、それには現場技術力の向上が必須です。全国めっき技術コンクールは、基本技術を改めて学び直す機会でもあります。現場の人材がこのコンクールへの挑戦を通じて得たものが、日々の生産技術の向上、現場力の向上に必ずつながると信じています。